人種主義と黒人文学

——ビガー・トーマスとルーファス・スコット——

安　部　大　成

(I)

「人種統合 (integration) を欲する一般の黒人は，白人との教育や経済上の平等な利益については関心を持っていない。だから，NAACPの連中が彼等の鼻面に，これらの問題をぶらさげても彼等は動こうとはしない。だが，NAACPの者達が彼等の耳元で，いつか黒人は白人の女と一緒に暮せる様になるぞ，とささやくと，彼等はこれらの問題に非常に興味を持つのだ。[1]」

黒人男が白人女を狙っている，だから，黒人運動が熱を滞て来たのだ，と南部の一白人牧師がオーガスタ・コーリャ紙に警戒の一文を表明した。1957年の夏の頃の事であるが，この年の南部に於けるキング師や進歩的黒人大学生等を中心とする，組織化された黒人運動を考えに入れて，この牧師の警戒心旺盛な批難の言葉を読むと白人が黒人の解放運動に感ずる，秘められた不安が何んであるかが，明らかにされている様に見える。

1963年の夏，20数万人の黒人や白人が公民権の平等を要求してワシントンに行進した際，一人の若い黒人男が飛び上って，「セックスの自由を！」と叫んだのが印象に残っている，[2] と黒人作家，社会学者であるC・C・ハーントンはその書 *Sex and Racism in America* (1965) の初めに述べている。

白人男は黒人男が自分達の女を狙っているのだと警戒し，黒人男が実際に白人女を狙っているとしても，何も不思議な事はない。白人も黒人も，この場合，人種主義 (Racism—白色人種優越，優美・黒色人種下等，醜悪主義) のドグ

マに緊く縛られているのである。白人は黒人を下等で，動物的で，醜悪な生き物だと思い込んでいる。獣性の強い彼等は優美で，高貴な白人女に性的衝動を強く感じているのだと思い込んでいる。黒人は黒人の女よりも白人の女の方が優美で，魅力的だと感じている。黒人女を拒否して，白人女を求めるのは，黒人女が下品で，醜悪だと思い込んでいるためである。これは人種主義のワナに落ている限り，逃れる事の出事ぬ偏倚な感情なのだ。そして，注意しなければならぬのは，人種主義は白人も黒人も共に非人間化するが，扁見と差別の弊害を受けている黒人の方に，この人種主義はより一層不利に有害に働く事である。白人は政治，経済，軍事力を所有力していて，人種的差異を根拠に黒人を差別し，搾取し，非人間化する。そして，人間を非人間化するという行為によって，自らをも非人間化する。但し，自らを非人間化する人種主義には巧妙，老獪な不正合理化，悪行正当化（rationalism）の機能が秘められていて，かつてガンナー・マイヤデルが *An American Dilemma* で，アメリカ人が人種差別行為が民主主義理念と抵触するために道義的不安に見舞れている，とその道義的矛盾を指適した時，C・シルバーマンが，アメリカの悲劇はこの道義的矛盾が存在しない点にあるのだ，[3] と反論した如く自らの不正に完く盲目である事が可能である。黒人の場合，一度この人種主義のワナに落ちると，これから脱れ切るまで，自らの人間性の回復は希望出来ない。黒人解放運動は白人の扁見，差別，支配より自らを解き放つ運動には終らない。黒人は自らを解き放つことによって，非人間的行為者に落伍している白人をも解き放たねばならぬのである。黒人解放運動が盛んになるに従って，両人種間の性関係の問題が避ける事の出来ぬ課題となって来るのはこれが，両人種間の，最も根本的な人間関係に渉わる問題だからである。この意味で，近年世に出た Calvin C. Hernton の *Sex and Racism in America* と Eldridge Cleaver の *Soul on Ice* (1968) の二書は企画的な意味を持っている。特に後者は，人種主義の眉薬に馳られて白い女の虜となり，精神錯乱をきたしたのち，ブラック・モズリムの洗礼を経てこれより脱し，マル

コムXの解放思想に到達，やがて独自のブラック・パンサー党員としての政治活動に延身するまでの自伝的文明評論集であって，生き方に密着した，迫力のある黒人の声明書である。前者は元来，新しい世代に属する黒人作家であるが，社会学者でもある彼が，Sex の問題，特に白人と黒人間のそれを文学作品に取り上げずに，社会学書で別個に取り上げて検討した点が注目される。ラルフ・エリソンもいう如く，文学作品はそれ自体で社会行動であり，[4] 作家の社会的責任もここで問われる。だが，社会学書はそれ自体で社会行動の力を持たないし，元来そういったものではないので，黒人解放運動の面から見る時，影が薄れるのも仕方あるまい。文学作品で白人と黒人の性関係の問題を取り上げる場合，特に黒人作家の場合，自らが黒人解放に関して取る態度，これへのアプローチ，イデオロギー，等を明確にすることを迫られるのみか白人と黒人への価値観をも露提する。従って，ハーントンの如く，社会学の書を著す方が自己を暴露する危険からのがれることが可能なのかも知れぬ。彼は黒人男女の白人異性への性的欲求のみでなく，白人男女の黒人異性へのそれをもこの書で明らかにし，特に白人女が黒人男に示す興味を人種差別と扁見が巣喰った病める社会の社会的性衝動として刻明に取り上げたため，白人過激派の激怒を買い，又，黒人男の白人女への哀れな程の願望に光を当てて黒人過激派の非難をうけ，身に危険を感じてアメリカを立ち去るに至った。[5] 社会学の書といえども，両人種間の性の領域を無遠慮に明らかにすることは危険を伴う仕事であるという事はそれ自体，アメリカに於ける白人と黒人の人間関係がその根底に於て人種主義の弊害を蒙っていて，人種間に性に根ざした深い敵意が存在することを示している。だからこそ，黒人解放の面では勿論，人間を肯定し，人間の生き方を問題にする文学に於ても，白人と黒人の人間関係，そのうちでも，最も根本的な関係である性関係は人間関係の真実性に触れる上で致命的なテーマであるといえよう。ここで，Richard Wright の小説 *Native Son* (1940) に現れる Bigger Thomas と James Baldwin の小説 *Another County* (1962) の主人公 Rufus Scott を取り上げ，

この二人の黒人男と各々に関連する白人女，メアリィとレオナの人間関係を検討し，アメリカの人種主義が両人種間の人間関係に如何なる働きをしているかを考えてみたい。

注 (1) *Augusta Courier*, 2 (June 17, 1957), 3. quoted in James W. Vander Zanden *American Minority Relations*, (New York : The Ronald Press Company, 1963), p. 133—p.p. 134.

(2) Calvin C, Hernton, *Sex and Racism in America*, (New York : Grove Press, Inc., 1965) p. 8.

(3) Charles E. Silberman, *Crisis in Black and White*, (New York : Random House, 1964), p. 10.

(4) Ralph Ellison, "*The world and the Jug*," *Shadow and act*, (a Signet Book 1966) p. 142.

(5) 「傷だらけの黒人」C・C・ハーントン著　横山一雄訳　芸文社，訳者あとがき p. 232—p.p. 233.

(II)

ビガー・トーマスは *Native Son* の主人公，つまり，文学的人間像である。彼は今日のアメリカでは黒人の人間類型としても用いられている程，ゲトーの住人の一典型として社会学的リアリズムの手法で小説に具現化された。ビガーは白人娘メアリイ・ダルトンを彼女の寝室で絞殺し，その白い身体を解体，焼却する黒人青年であるが，彼が白人世界の愛と美のシンボルである白い女を残酷な仕方で破壊する事によって，腐蝕したゲトー生活の中で，生ける屍体と化しかけていた自己の生命感を回復する，という小説の設定は人種扁見と差別を展開する白人社会にショックを与える意図があった。*Native Son* は黒い鬼子を生んだ白人社会への警告と，単に肌が黒いという人種差異によって非人間化されてゆく，黒人に科せられた社会的，人間的不正への抗議の小説で，黒人青年と白人女との人間関係の面に視点はあまり置かれず，ビガーを生んだ社会条件，彼を規定する社会的現実の面が強調されているが，

それにも拘らず，ビガーの白人女の感受の仕方，思惑，欲望，願望が現わされている。この現わし方がリチャード・ライト自身の白人女への関係をも暗示するのでこの点でも検討に価するが，ここでは触れない。

ルーファスは黒人のミュジィシャンでビガーの様なルンペンプロレタリヤではないが家族を置き去りにした流れ者的人間で白人女レオナに街で知り合い，同棲する。レオナは南部出身の離婚した女で不幸な過去を持つが，人種扁見を持たない女であり，ルーファスを心から愛する。もっともアメリカでは，家庭的不和から離婚して黒人と肉体関係を結ぶ白人女も性に根ざした精神病的要素があると見られるが……。ルーファスはこの白人女の愛情を信用出来ず，焦燥し，逆上し，彼女を暴行することによってこの憤満を処理する。レオナはルーファスの元を去り，彼は河に身投自殺する。

ここで，ビガーとルーファスの関係について述べる必要がある。ボールドウィンは *Another Country* (1962) を世に出す頃，文芸評論「ああ，哀れなリチャードよ」(*Alas, Poor Richard*, 1961) でライトの *Native Son* のセックスの欠如を批判した。彼はチスター・ハイムズの *If He Hollers Let Him Go* を別として，黒人によって書かれた小説の殆んどがセックスの占めるべき領域を暴力で占めさせており，特にライトの *Native Son* に於てはなはだしい[2]という。E・クリーヴァはこれに反論して，暴力が優勢な領域を占めるのはアメリカが人種主義の弊害を蒙った暴力の国であるためだ[3]，とライトを擁護しているが，ボールドウィンの主旨からはずれた反論である。ボールドウィンは，これを指適するのは自分が初めてではないが，と前置して「この暴力の根源は，大低の場合，文字通りの泣きわめきであるが，去勢されている男の憤怒にある[4]。」ときめつけている。「去勢されている」というのは白人女は美しく，高潔であり，黒人男は醜悪で下等だから触れてはならぬという人種主義の禁欲律に縛ばられている，という意味で性欲がないのではない。それはむしろ逆であって，C・C・ハーントンも明らかにしている様に，白人女は黒人にとって禁断の果実であるが故に，ますます手に入れたくなる[5]のであ

る。だが，人種主義のドグマを受け入れているため，白人女は一層魅惑に富んで居り，欲望をそそるが，まさにこの人種主義のドグマによって，黒人は自らが一層醜悪で下等に感じられる。劣等意識のからまった性衝動がこの「去勢された男」を「憤怒」させ，暴発せしめるのである。ボールドウィンはビガー・トーマスのメアリィへの暴力——絞殺，死体解体，焼却——をこの「憤怒」の現われと見ている。そして，同時に白人女の身体に狂的に斧とナイフをふるうビガーに，白人世界の黒人に対する性的被害妄想をぶち懐さんとする，シンボリックな意味を読んでいる。ともかく，彼はビガーがメアリィに暴力をふるい，性的には肉体の単なる触れ合いにすぎぬ行為しか持たぬことを批判し，もっとセックスの領域に立ち入るべきだと主張した。ルーファス・スコットはボールドウィンが自ら黒人男と白人女のセックス関係を描いて見せたところの人物であって，ビガー・トーマスと比較されるばかりでなく，両人種間の人間関係に深く踏入した点でビガーを越える人物なのである。

注 (1) リチャード・ライトは St. Clair Drake and Horace R. Cayton, *Black Metropolis—A Study of Negro Life in a Northern City*—(Harper & Row Publisher : New York and Evanston, 1945) の Harper Torchbook に序文を寄せてビガー・トーマスがゲトーの人間類型であることを自ら述べている。ここで彼は Native Son を書く刺戟を社会学者，Robert E. Park, Robert Redfield, Louis Wirth 等の提出した社会学事実より与えられたといっている。そして，*Native Son* を読んで Bigger Thomas の真実性を疑うものはこの *Black Metropolis* が示すゲトーの少年犯罪の率を検討してみるがよいと，ビガーが文学作品上の人物にとどまらず，社会に実在する一つの人間類型でもあることを主張している。最近のものでは *Newsweek* (*June* 30, 1969) の特集 Black America p. 20 でルポライターがビガーを人間類型として使用している。

(2) James Baldwin, *"Alas, Poor Richard," Nobody Knows My Name* (A Dell Book, 1963.) p. 151.

(3) 「氷の上の魂」エルドリッヂ・クリーヴァー，武藤一羊訳，合同出版，p. 148.

(4) James Baldwin, op. cit., p. 151.

(5) Calvin C. Hernton, op. cit., p. 66.

(III)

ビガー・トーマス：

ビガーがメアリィに接する機会は彼が富豪ダルトン家の運転手の職を得て，彼女を大学へ送る仕事を与えられた時に始まる。彼はこの職を得る前にゲトーの仲間と白人商店 Blum's Delicatessen に武装強盗を仕掛ける計画を立てていた。これは単なる物取りを目指したのではない。彼はゲトーの生ける屍体と化しつつある自分の存在に恐怖を感じると共に，彼をこうした境遇へと追いやった白人社会がゲトーの彼方に広がっていて，一切を所有しているのを知り，怒りが湧き上るのに耐えかねていた。酒に酔い痴れて睡りこけ，そんな恐怖と怒りを忘れてしまえ，とさとす仲間の言葉をうけつけられぬ程，彼は己れの腐蝕された生命に目覚めていた。白人に抑圧されていることへの原始的な憤怒を何んとか処理するには白人社会の権力を象徴する白人警官に挑戦してみる事だ。Blum's Delicatessen を襲撃すれば，この挑戦の幕は一挙に切って落される。黒人不法者を紛砕せんと，白人社会は警官隊を繰り出して来るのだ。この白人社会へのシンボリックな挑戦によって，頻死の状態にある彼の生命はよみ返るであろう，と彼は感じた。だが，この意義深い斗いの計画は彼自身の白人恐怖感と仲間の非協力で挫折してしまう。赤貧にあえぐ母の強い望みに応じて，彼が招介された仕事をもらいに行くことになったのは，この計画に失敗してからであった。彼は白人社会に働いた連中がケドーに持って帰ってくる伝説めいた話に興味があった。白人の金持の娘に好かれて秘かに結婚して国外に去り，親元より送金をうけている黒人青年の話など……。ひっとすると，白人女との冒険もあるかも知れぬ。彼はともかく働いて見る決心をした。

白人不信感は彼に一丁のピストルとナイフを肌身につけさす。この信頼の置ける唯一の友を身につけて，彼は白人高級住宅街の芝生を歩んでダルトン家を訪ねてゆく。

メアリィは女子大生で共産主義者であるボーイフレンド，ジャンがいる。彼女の父は黒人学校に幾百万ドルも寄付したりする慈善家であり，良家の育ちも手伝って，メアリィはビガーに対して何ら偏見を持っていない。それのみか，この若い二人の白人男女はビガーと完く同等の人間であることを自明の理として，親しく，友情を持って接してくる。

ビガーはこの二人が彼に親密であるのを嫌悪し，憤慨する。それは彼が白人ではなく，虐げられた黒人であることをひしひしと感じさせるからであった。そればかりではない。メアリィの身体に触れ合う事ですら，彼に激しい抵抗感を生じさせる。運転席に彼女がごく自然に坐り込んで来る時，彼女の白人女の香りをだたよわせる髪の

においが彼の鼻をなで，やわらかい太ももの圧迫感が彼の太ももに伝って来るくるだけででも彼は狼狽し身体を硬直させる。白人女の身体に触れられると彼の肉体の黒さが一段と痛感され，苦痛であるからこれを嫌悪するのであった。

ライトはこのビガーの偏倚な人種意識を(A)白人抑圧者と黒人被抑圧者の人種関係にもとずく被害者意識と(B)人種主義の強力な作用下にある恥辱意識の二面でとらえている。

白人がシカゴのノースサイドに住み，黒人がサウスサイドのゲトーに住むという住居地域の人種的分離化は貧富の差をはなはだしくし，生活様式を異ったものにし，相互の意志の疎通を遮断する。そして，相互不信，反目，憎悪，危険感を高め，扁見と差別感を増倍させる。

「畜生，見ろ！　俺達は此処に住み，奴等は向うに住んでいるんだ。俺達は黒く，奴等は白い。奴等がもの持ち，俺達は持てない。奴等が事を運ぶが俺達はそれが出来ないんだ。俺達はちょうど刑務所に暮しているようじゃないか。[1]」　仲間のガスに彼がぶちまけたと同じ激怒をビガーが二人の白人男女の親しい接近によって生じさせるのは(A)が触発されるからである。

ジャンの白い手が彼の黒い手に握手したり，メアリィの白い太ももが彼の黒い太ももに接触して，彼を逆上させるのは(B)が頭をもたげるからである。彼は，黒い肌がアメリカ社会では「恥辱の印」であることを知っているのであった。そればかりではない。彼は自分自身をあたかも恥辱の化身であるかの如く感じ切っている。だから，白い身体の持ち主の前に晒け出された彼の黒い身体に触れるジャンとメアリィの行為は，人種扁見に汚れていない人間的な，友情ある行為ではなく，彼にとっては恥しめの行為なのである。

(A)と(B)の作用で白人との個人的接触を廻避しなければならなくなった彼がメアリィの身体をだきかかえ，その白い肉体のデリケートな動きを全身で求める様に感じながら，真夜，彼女の邸宅の裏口からしのび入り，彼女の寝室に入ってゆく事になるのは，どういうわけであろうか。

三人はビガーの運転する車で黒人街にあるレストラン Ernie's Kichen Shack へ行

く。そこで二人はビガーに黒人解放運動を行っている白人達の話を聞かせたり，彼は自分の生い立ちを話したりする。ジャンがビール，ウィスー，チキン等を注文してひと時を過すが，彼等がレストランを出る頃には，ほろ酔っている。夕ぐれの街をドライヴしながら，彼等は次のウィスキーの一瓶を空にしてしまう。都会の夕暗を酔ってドライヴしている間に，アルコールは三人を捕えてしまう。ジャンとメアリィは後席でたわむれ合っている。ビガーはバックミラーに映ずる二人のもつれ合いを時々眼にとめながら，極めて落着いた気分で車を運転する。アルコールの力が，彼の意識と感情を縛りつけ，責めつけていた人種意識の縄をゆるめたのである。ジャンが，途中で降りるとメアリィは運転席にビガーと並んで坐り，ジャンに別れを告げる。

二人がダルトン邸に着いた頃，時は真夜を過ぎメアリィは泥酔してしまっている。彼女はくずれた恰好になっていて，ビガーの助けを必要とする。彼の眼に彼女のドレスが乱れ，ストッキングが終るところが見える。彼女を抱え起した彼の腕に，白人女の柔らか味が伝って来るが，それはもはや彼の肌の黒さを思い出させはしない。

彼女を助け起して車外に出た彼は，ふと身の危険を感じる。若しも，この現場を他の白人の男に目撃されたらどうなるか？白人女と親しくなったり，手を出そうとしたりその様に疑われて生ずる血生臭い，恐しい出来事を南部出身の彼は知っていてた。リンチ，殺害，去勢，袋だたきから軽くて失職という白人の掟を。彼は人眼につかぬ様，あわただしく彼女を家につれ込む。酔っぱらった彼女は床に崩れかけては音を立てる。彼はダルトレ家の人々が目覚めるのを恐怖する。彼女のろれつの廻らぬ口から，焦燥感に追われながら，彼女の寝室の在り場所を聞き，誰れにも気づかれぬうちに彼女を部屋に送って立ち去ろうと努力する。彼は身の危険を感じながらも，抱きかかえたメアリィの身体の魅力に抗し切れない。彼は彼女の白い肉体は彼のガールフレンド，ベシーの黒い肉体よりも柔らかいナと，しみじみと感じた。そればかりか，メアリィはやさしく美しい女の子だ，と感ずる。アルコールは人種意識から彼を解き放つ作用をし，それはまたメアリィを泥酔させ，意識を殆んど奪い，主体性を失わせている。ビガーが安堵出来ているのもアルコールが相方に働いている間だけなのだ。

彼はメアリィの身体をベッドに横たえ，彼女の身体をさわり始める。早く立ち去るべきだという緊迫感が彼を襲うが彼は彼女の胸部から手を離したくなかった。彼女は微かに反応を示す様であった。次の行為へ，と彼は移らんとして電撃の様な恐怖感に打たれて硬直した。彼の背後のドアに誰れかが来て立っているのだ。それは彼女の母，盲目のダルトン夫人であった。彼女は静かにドアを押し開けて，暗がりの中に入って来る。

ビガーのメアリィに対する肉体上の行為は性交渉には到らずここに終結する。そしてこの後に，小説 *Native Son* がその本領を発揮する基となる，メ

アリィの絞殺，死体解体，焼却へと一挙に核心的な事件が展開される。

ライトが黒人男の白人女との接触をアルコールの作用と社会学上の概念である Risk of Crime の働きで関係づけさせているのは注目されるべきである。これは人種意識の弊害によって，この弊害を蒙っていない二人の白人男女に自分の側から人間的接触を封じられた黒人青年を，主体性を欠如したまま，又，人種差別の所産で非人間化された状態のままで，極めて親密な形態，白人女を彼女の何んの抵抗も反揆をも受けずに抱きかかえ，寝室にまでもつれ込ませる上で，手法上完全に成功している。アルコールと Risk of Crime（犯罪にかかり合う危険性）の概念なしには，ビガーをメアリィに関係づけさせることは出来ぬ程，ビガーは白人社会にとって異常分子なのである。元来，この小説は白人社会の人種扁見と差別，人間的不正が生んだ異常分子，破壊分子としてビガーを設定している。この異常分子を生んだ責任は黒人側には存在せず白人側にある。人種意識の捕虜と化し，非人間化してゆく自分に恐怖し憤怒したビガーの悲劇が同時に白人娘メアリィの悲劇に連っている。これが，この小説のプロットであり，抗議小説の代表作となった由縁でもある。だが，この設定の仕方はボールドウィンも指適する如く，致命的な誤ちを犯した。ビガーは差別と扁見の犠牲者となり，人間性を否定されてしまったのである。「ビガーの悲劇は彼が冷たかったり，黒かったり，飢えていたりするためではなく，彼が黒いアメリカ人であるためでもさらになく，彼の悲劇は彼の人生を否定する神学を受け入れた事，つまり，彼が準人間（sub-human）であることの可能性を認め，従って，生れた時に言い残されていた，こうした残忍な基準に応じて，遠慮勝ちに，自己の人間性のために抗争しなければならないと感じている事にある。[2]」

ライトは，また，Risk of Crime に続いて黒人に対して行われる不正裁判 dual justice（二重裁判）という社会的不正事実を援用し，メアリィの死体解体，焼却の動機づけを暗に行っている。「犯罪にかかり合う危険性」とは簡単にいえば人が自己の所属する社会階級，性別，肌の色によって，加害，被

害をも含めて，犯罪に巻き込まれる危険性の度合である。これには警官の眼につかれ易い要素，逮捕され易さ，逮捕された場合，裁判にふされ，有罪判決を受け，刑罰に服す可能性の強さが加えられる。[3] 黒人が白人よりも一層この危険性に見舞れるのは彼等が大多数，下層階級を占めている点もあるが，肌の色に加えられている扁見の働きが大きな役割を果している，[4] と米国の犯罪学者ウォルターC・レックレスは指適している。「二重裁判」は白人と黒人に対する各々異った裁判を行うことで，黒人が常に不利な処置をうける差別裁判をいう。

これらの概念を援用して，ヒガーのメアリィに対する性関係を，その寸前で終えさせているのはライトがこの黒人男と白人女との最も最密な人間関係に触れることを廻避したためと思われる。

ライトはビガーのメアリィに対する肉体上の行為は彼が彼女の白い肢体に魅かれる様子を描くだけであったが，彼女を絞殺した後，その肢体をナイフと斧で解体する有様は残酷な程に描いて見せる。絞殺したのは結果であって殺意は完くなく，これはメアリィの口を枕で圧して，静かにさせ，盲目のダルトレ夫人をやり過そうとする意図したにすぎぬ。夫人が去った後，気がついて見るとメアリィは死んでいたのだ。白人女の寝室に入っている事が招く刑罰の危険感が招いた過失致死なのである。解体したのは運び易くするためであり，焼却したのは「二重裁判」のある社会への不信感に襲われて行った証拠いん滅である。こうした弁明を暗示させながら，残酷な行為を熱狂的に描写し表現しているところに作家ライトの白人社会への，白人へのアプローチの仕方が伺われる。ボールドウィンがライトの小説には性が占めるべき領域を暴力が占めていると批判したのは，メアリィの死体に加えるビガーの暴力を描かずに，生きていて，しかもアルコールで意識を失っていない彼女との性関係を描くことによって，白人と黒人の人間関係を具体的に取り上げ，そうすることによって，ライトの白人世界への態度をも明らかにすることを迫ったのであろう。ライト程その豊かな社会学的知識を援用して黒人に加え

られる社会的不正，その社会的不正が黒人の人間形成にどんな働きをするかを，納得ゆく様にダイナミックに小説に現わした作家は他にいない。彼は白人社会に黒人に対して何を為すべきかを問わしめたが——それはビガーを弁護する白人弁護士マックスの言動に表現されている——人種扁見と差別の弊害をうけ，人種主義の禍によって人間性を腐蝕させている黒人が，如何にして自らを解放すべきかは課題にしなかった。人種差別国に於ける白人と黒人の根本的な人間関係を問題にしなかった当然の帰結かも知れない。

注 (1) Richard Wright, *Natiue Son* (A Signet Book, 1964) p. 23.
(2) James Baldwin, *Notes of a Native Son*, (A Bantam Book, 1955), p. 17.
(3) Walter C. Reckless, *The Crime Problem*, the 3rd ed., (Appleton-Century-Crofts, 1nc., : New York, 1961) p. 33.
(4) Ibid., p. 42.

(IV)

Another Country (1962) には多くの人物が登場する。まずここで検討しようとする Rufus Scott—黒人ジャズドラマー，Lda—ルーファスの妹，Leona—南部出身の白人女，ルーファスの愛人，Vivaldo Moore—白人作家ルーファスの親友，Richard Silenski—白人作家，Cass—白人女，Richard の妻で主人と共にルーファスの友人，Eric Jones—白人男優，ルーファスの同性愛のパートナー，Stive Ellis—白人演劇プロデューサー。

彼等は皆んなこの小説の主要人物であって相互関係を持っているから，ビガーの如く，単一に取り出すことは難しいが，ここではルーファスがレオナとの破局に絶望してヂョーヂ・ワシントン橋から身を投げるまでの，小説の約五分の一の部分内での彼を取り上げることにしたい。

ボールドウィンは黒人文学が社会問題の文学であり，何らかの形で抗議文学であった近代の伝統から訣別した作家である。黒人の苦悩がその肌の色に

加えられる扁見と差別にあると認識し，これを生ぜしめる社会的不正の叫弾を課題とした抗議文学の代表作家リチャード・ライトに反撥しつつ，彼は黒人の苦悩は彼が人間であることに由来すると主張し，この見解を表現する事によって肌の色の制限を課せられた黒人文学をその制限から解くことによって黒人文学を人間の文学へと展開させた。この展開の仕方に一つの問題が含まれている。つまり，彼は黒人が人種的差異，肌の色の黒さによって扁見と差別の対象となり苦悩する面よりも，人間である故に苦悩する面に注目する結果，人間が社会的存在であるという真実を軽視する傾向を強くした。従って，人間が社会的存在であることによって苦悩する問題の解決を放置し，これを人間存在の苦悩そのものに転化することによって，人間関係を社会から孤絶させてしまった。*Another County* に登場する人物が異性愛や同性愛を通じてお互いに白人と黒人である異人種間の信頼と愛の確証を求めて苦悩するのみに終るのはこのボールドウィンの人生観，人間観が表明されたものである。彼等は苦悩するか，ルーファスの如く自殺するか，レオナの如く精神病棟に身を置く以外に術がない。彼等は人生を受け入れるか，受け入れないかのいづれかしかないのである。「我々が人間であることが我々の重荷なのであり，それが我々の人生なのである。我々はそのことの為に斗う必要はない。我々はそれよりも際限もなく困難なことをする必要があるのみである。つまり，人生を受け入れることなのである。[1]」と彼はいう。ルーファスは人生を受け入れられなかった。それは人生が重荷であったためであろうか。決してそうではないのだ。彼は人種主義に圧倒され，黒人は下等で，性欲の化身だという人種主義の教理の一つを受け入れることによって自分が人間であることを嫌疑し，その苦悩に耐え難く，自分と人生を放棄したのである。彼は人間であることに苦悩したのではなく，黒い人間であることが招来する苦悩に苛まされたのである。ルーファスが黒人であることによって蒙った苦悩の源泉は人間存在にはない。それは，具体的にいえば，白人女レオナは優越し，優美であり，黒人男ルーファスは下等で，醜悪であるという人種主義が

二人の人間関係を拘束しているところにある。レオナはこの人種主義を受け入れてはない。だから，ルーファスを人間的に愛することが可能であった。この主義を受け入れていたのはルーファスであり，従って，白人女の愛を，人種主義に腐蝕された性衝動，下等で獣性の強い黒人の動物的な性力を欲求したものと嫌疑し，逆上し，絶望したのである。ルーファスがレオナを受け入れられなかったのは白人社会の人種扁見と差別の圧力によるのではない。レオナを受け入れられなかったのは，彼が人生を，人間であることを，受け入れられなかったためである。人生を受け入れ，人間であることに苦悩出来ない者は，人間であることを守るために，人間を否定せんと攻撃して来る人種主義と斗うことは出来ない。ルーファスが人種主義から自らを解放しょうと動機づけられないのは人種差異が招来する黒い肌を持つ者の苦悩と人間の苦悩をスリ代えてしまっているためばかりではない。彼はこの小説に登場する他の人物と同じく，社会的に孤立した個人の結合，及び肉体関係に人間の信頼と愛の確証を探らんと試みるところにある。これは「社会的存在としての人間の真実(アリテイリ)は彼の唯一の真実ではない」と主張するボールドウィンの人間観の一面が強く表われたものであろう。

ビガートーマスがメアリィと肉体関係，性関係を持たず，むしろ彼女の肉体解体に熱狂的に行為することを批判し，セックスの面を描かず，暴力行為の面に表現を集中させるのは「去勢されている」黒人男の「憤怒」の現われであると非難したボールドウィンはルーファスとレオナの性関係を熱狂的に刻明に表現し，人間関係の束の間の喜びと安堵と，やがて訪れる抗争とを描いた。これはビガーとメアリィの関係，黒人男と白人女の関係を両人種の隔絶から生ずる暴力行為からルーファストレオナの関係，両人種の接近によって生れる肉体関係，性行為へと新しい分野を開発し，黒人文学のテーマを両人種の人間関係に肉迫させた点で企画的な意義を持つ。だが，ビガー・トーマスとルーファス・スコットの間に，白人女に接近する態度と仕方に質的な差異が生れてはいるが，彼等は意識的には根本的に変化の見られない黒人で

ある。つまり，ビガーもルーファスも人種主義に骨の随まで病めつけられた敗北主義者である点で同一の人物なのである。人種主義によって人間性の一角を腐蝕させ，やがて人間性全体を摩痺させる敗北主義者にルンペンやジャズ・ドラマーの差はない。

ルーファス・スコット：

彼がレオナに出会ったのはハレムにある黒人経営のジャズ酒場であった。この酒場は音楽や酒に歓楽と慰めを求める様々な人々で満員であった。裕福な者も貧しい者も白人も黒人も集って来ていた。彼はこのジャズ酒場のドラマーであった。仕事を終えてスタンドを降りた彼をじっとみつめている金髪の女がレオナであった。彼女は家庭不和で離婚し，南部を去ってニューヨーク市へ来て間もなかった。ハレムを見物しょうと出掛け，或るクラブの前を通りかかって，音楽の流れてくるのに魅かれてそのクラブに入った。そこがジャズ酒場だったのだ。彼女は音楽が気に入り，黒人ドラマーと知り合いになったのが楽げであった。ルーファスは彼女をつれて外に出，友人の主催するパーティに誘う。そのパーティは高いビルディングの中にあり，エレヴェイターで昇る途中，少々緊張気味にふるえているこの知り合ったばかりの白人女を一人にしておくべきか，どうしょうかと気がかりになるが，むらむらと欲望が湧いて来て，彼の身体の一部が動き始める。ボールドウィンはこれを遠慮なくダイナミックに表現して小説の初めから，黒人男の白人女への欲望をはっきりと打ち出している。二人はパーティに加わり，その雰囲気に気持を和げ，酒を飲み交して打ち解ける。グラスを手にしてバーコニィに出た二人はお互の本心に探りを入れ始める。ルーファスはレオナの眼が彼を間違いなく誘っていると感じる。ニューヨークへ来て，見たいものはみんな見たか，と問う彼に，見たものがみんな欲しい，と彼女は答える。そこで彼は今ここで見たいものを見てるか，と問い返して，二人が酒を飲んで馴染みになった本心がセックスにあるのであろうという暗黙の合意に触れんとする。これに対して彼女はあなたはどうなの？と一歩踏み込んで核心に迫って来る。返答に窮した彼に彼女は重ねて返答を求める。そこで彼は彼女のグラスを取り上げて半分を飲みほしバルコニーの暗がりに身をかくして，ここへ来て返答を得ろ！と呼ぶ。彼女は彼のところへやって来て立ちはだり，困惑と怒りを秘めて彼の耳にささやく。一体私に何をしょうとしているの？　彼はあれをしょうとしてんだ，と答えて彼女の身体を抱き寄せる。少々逆った後，彼女は彼に抱きつき，ここで二人の性交渉が始まる。ボールドウィンはこの行為を二頁に渡ってリアルに描写[2]している。この描写はビガーがメアリィの死体を

解体する行為のそれに匹敵[3]するものである。

この行為でボールドウィンはルーファスの性器を「武器」という言葉で表現し，ルーファスは彼の下になっている白人女をミルクの様に白い牝犬と呪いながら行為している。ルーファスは白人女の魅力に取付かれた男である[4]が人種関係上の被抑圧者として白人男に強烈な憎悪を抱いている[5]。これがレオナとの行為中に頭をもたげ，白人男への又黒人を蔑視して相手としない他の白人女への復讐行為ともなる。

レオナに愛を告白された彼は彼女と同棲する。彼がドラマーの仕事をやめなければならぬほど酒びたりし始めるのは彼女と生活を始めて生ずる苦悩のためである。白人女を同伴して歩く彼に白人達の敵意ある眼が向けられる。街の特定地域の酒場や社交場以外の世界には住み難いどころか危険が感じられるのであった。この人種扁見と差別が彼等の話題になるとルーファスは感情を爆発させる[6]。彼女は折りにふれて「黒色人であることに何も悪いことはないわ。」という。これが彼には問題であった。彼は彼女の眼に底知れぬセックスの秘密がかくされていると感じ，彼女が彼のセックスに興味を持っているからだと嫌疑しているからである。これに始まる二人の喧嘩はルーファスに暴力をふるわせ，発作的に彼がレオナに最も屈辱を感じせしめ得ると感ずるあらゆる仕方で彼女を姦させる。そして精神異状に落ち入る彼は酒場へと逃れて，自らの行為を歎く。

ルーファスにはヴィヴァルドーという白人男の親友がいる。彼がこの白人男をこの世の唯一の親友と信じたのはヴィヴァルドと彼のガールフレンド，白人女ジェーンの三人で白人のバーに入って体験した乱斗の時である。ルーファスがジェーンと馴染み深いのを不快に感じた白人男達の集団暴行がルーファスに加えられた。ヴィヴァルドーはルーファスを防衛して共に勇敢に斗い，二人は殴り倒されて血まみれになる。ジェーンの手引きで，重傷を負った二人は肩に寄りかかり合って豪雨の中をジェーンの宿へとさまよう。アイルランドから来たヴィヴァルドは人種扁見を知らない白人であった。ルーファスのために死を賭して斗ってくれる男であるのを，彼はこの血流の日に納得する。この友人が彼のレオナへの暴行を見かねて彼を戒めるが，ルーファスはここで彼の本性を暴露し，ヴィヴァルドーとレオナを嘲笑する。レオナが離婚したのは彼女の亭主が野獣の様な行為で彼女を隋落させ，彼女はこの隋落した性で他の南部の黒人と行為するに及んで，亭主に追い出されたのだと罵倒する。ルーファスの暴行で顔の形が変っているレオナをつれ出し，しばらくルーファスを一人にして気を静めさせようとするヴィヴァルドーを前に，彼のものは性力がないから，決してお前を満足させはしない，お前はきっと俺を求めてもどってくる，俺なしにお前は満足感を味わえない，と侮辱し嘲笑する。彼は自分が黒人であり，黒人だから特別に性欲が強く巨大なものを所有しているから白人女を満足させられるのだと公言し，自ら性にまつわる人種主義に身を落し，これを誇らしげに利用しているのである。しかしヴィヴァ

ルドーが彼のアパートにもどって来ると彼は涙を流して「人間が人間と見なされるどこかへ」[7] 行きたいと告白する。彼は黒人であるが故に白人達と抗争せねばならぬのが苦しいという。彼にとって外界は扁見と差別に満ちているのだ。「……お前はあの女が俺について知っているすべてのことが分っているか？　彼女が知っている唯一つのことを？」[8] そういって彼は手を自分の股間に荒々しく置く。彼はレオナに人間として愛されているのでなく，生ける黒い性具として好まれているのだと判断している。彼はこのために精神が錯乱しかけている。彼はレオナに愛情を感じはするが人種主義で自縄自縛になった彼の精神の土壌にこの愛情は育たない。

やがてレオナは南部に去り，傷心の彼は白人の友人夫妻セレンスキーの同情をうけたりするが大都会の孤独と自滅感に襲われ，レオナの名を呼びながらジョーヂ・ワシントン橋から投身自殺する。偉大な建国の父，ワシントンを持つ国，アメリカは彼には他国なのであった。

注 (1) James Baldwin, "*Everybody's Protest Novel*" (1949) in *Notes of A Native Son* (A Bantam Book, 1958), p. 17.

(2) James Baldwin, *Another County* (A Dell Book, 1963) p. 23. pp. 24.

(3) Richard Wright, *Native Son* (A Signer Book, Fifth printing, 1964) p. 89, pp. 91.

(4) James Baldwin, op. cit., p. 74. ルーファスが一人の身体つきのいい金髪の娘に眼を向け，想像を始める。彼の手がこの白人女の胸より下半身に触れていく様子が描かれるが，実際に女を目撃しつつ，想いの中でこの女に自分の想いのままの個所に手を触れていく様子はそれが想像力の世界で行われるので一層，執拗な感じを湧せる効果がある，白人女に思いを抱く黒人が表現されている。

(5) Ibid., p. 17. 彼はレオナと話している時にふと軍隊訓練の日のことを思い起す。彼は白人の士官に殴り倒され，口を皮革で踏み押えられていた。泥まみれになり，血だらけになった顔を彼は涙でくしゃくしゃにしていた。この思い出が白人への怒りとなって胸を圧する。

(6) Ibid., p. 49. pp. 50.

(7) Ibid., p. 62.

(8) Ibid., p. 62.

(V)

アメリカに白色人種優越主義思想が抬頭し始めたのは民主主義理念に基ずく反奴隷制度論が展開され始めた頃からである。この人種主義思想は民主主

義と人道主義に反する奴隷制度を両立させるための不正合理化の役割を果すものであった。この不正合理化は奴隷制度を持ったギリシャ的民主制の援用黒人は神に罰せられ永遠の下僕とされたノアの子，ハムの子孫であるという聖書的釈明，黒人は未開人種であるという科学的でない生物学的説明等によって時代を経ながら効果的に行われ，奴隷制度を単なる経済上のシスティムより南部の生活形態へと変質せしめた。奴隷制度廃止によって，この経済制度は崩壊したが人種主義的生活形態は存続し，組織的人種差別と隔離制度という特異な社会制度を形成せしめ，法的不法的制裁によってこの制度を守り旧奴隷である黒人を白人の下位に地位ずけることになった。この黒人差別と隔離策は南部の文化全体に影響力を及ぼし，両人種の感情と人生態度に侵透し，両人種間に猜疑心，反目，暴力感情を育成した。扁見と差別は両人種の抗争によって深刻化し，差別と隔離策が生む黒人の劣った生活状態，制約された能力は悪循環となって人種主義思想を増々育て伝播させ，これはアメリカ北部にも侵蝕して行った。かくして，人種主義はアメリカ文化の一つの文化的要素となった。[1]

リチャード・ライトは人種扁見と差別の生んだ黒い鬼子，ビガー・トーマスを描き，この男をして白人娘メアリィを殺害せしめる差別的社会条件と社会的現実を明確にし，白人社会に対し，その社会の人間的不正に目覚めさせんとした。これに対して，ボールドウィンは，社会的条件や現実の面を重視した社会的存在としての黒人よりも人間的存在としての黒人，ルーファス・スコットを描き，そうする事によって，文化の中にひそむ人種主義が黒人にどんな効果を及ぼすかを明らかにした。だが，前者は黒人を殺人犯として社会的自殺行為に終らせ，後者は人種主義の犠牲者として自殺せしめた。主人公に関して云えばルーファスの方がビガーよりも人間的である。それは前者が他殺者で，後者が自殺者であるためではない。前者は白人との人間関係を封じられた男であり，後者は白人との人間関係を持った男，つまり，人間として，互角に白人と対等する存在であるためである。この意味に於てルーフ

ァス・スコットが黒人文学像として持つ意義は大きい。彼は人種的不正が生んだ人物ではなく，アメリカ文化にかかり合った人間なのである。ルーファス・スコットの誕生によって，たとえ，ボールドウィンがそれを意図していなかったにせよ，アメリカ文化は人種主義という文化的要素を包含するものであり，黒人はこの人間否定的文化要素に対し，自らを解放する手がかりを求めることを要請されるであろう。この意味で，アメリカ白人とアメリカ黒人の人間関係をテーマとする文学作品は黒人解放運動と関連して，検討されねばならぬ重要なテーマである。

注 (1) James W. Vander Zanden, *American Minority Relation,* (the Ronald Press Company, 1963) Chapter 6, Ideological Factors, p. 126—p.p. 142 及び, Arnold M. Rose, *Race and Ethnic Relations in Contemporary Social Problems,* edited by Robert K. Merton and Robert A. Nisbet (Harcourt, Brace & Wored, Inc., 1961) p. 353—p.p. 363 参照。